

第二次 入学試験問題

国語

函館ラ・サール中学校

2022.2.3

〔問題一〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【I】

ルールを大切に考えるという発想は、規則を増やしたり、自由の幅を少なくする方向にどうしても考えられてしまうのですが、私が言いたいことはそういうことではありません。むしろ全く逆なのです。

ルールというものは、できるだけ多くの人にできるだけ多くの自由を保障するために必要なものなのです。なるべく多くの人が、最大限の自由を得られる目的で設定されるのがルールです。ルールというのは、「これさえ守ればあとは自由」というように、「自由」とワンセットになっているのです。

逆にいえば、自由はルールがないところでは成立しません。

「何でも好き勝手にやつていい」ということが自由だとしたら、無茶苦茶なことになってしまいます。人間というものは総じて自分の利益を最優先する傾向があるわけですが、「自分の利益のことしか考えない力の強い人」が一人いたら、a グスウの人間からなる社会における自由はもうアウトになります。この場合、誰か一人だけが自由で、残りの人はみんな不自由ということになりかねません。① ルールの共有性があるからこそ、自由というものが成り立つのです。

* ホッブズの「社会契約論」を思い起こして下さい。

人間が生きているということの本質は自由であり、欲望の実現です。ルールとは、それぞれの人が欲望を実現するために最低必要なツールなのです。

欲望は、百パーセントは実現できないかもしれない。しかしたとえ一割、二割、自分の自由をがまんして、対等な立場からルールを守ることではか、社会のメンバー全員が自由を実現することはできないのです。そうすることによって、残りほとんどの欲望は保障されます。でもルールというものの本質がそういうものだということは、なかなか了解されにくいのです。

交通規則を思い出してください。どんなに急いでいても前の信号が赤ならば必ず止まる。一見すると「早く目的地に着きたい」という欲望は制限されていますが、そうした欲望を多少抑制することによって、誰もが安

全に確実に、事故に合うよりはずっと早く目的地にたどりつくことができるのです。

そして「秩序性」というものは、最低限のルールをお互いが守ることの中から、結果として出てくるものです。秩序正しさそのものを目的にすると、人びとはより多くの自由をがまんしなければならなくなり、息苦しさが増してしまします。

社会のルールで何が一番大事かということは、いろいろな社会によって微妙に違ってくるかもしれませんが、でも、どんな社会にでも大体共通して大事に考えられているルールがあります。それは、「盗むな、殺すな」という原則です。

これは、社会のメンバーそれぞれの生命と財産をお互いに尊重するというルールになっっているわけです。

どうということかという、自分の気分しだいで勝手に人を殺していいということになると、今度は自分がいつ殺されるかわからないということにもなりうるわけです。ですから、「殺すな」は結局自分が安全に生き延びるという生命の自己保存のためのルールと考えられるわけで、^②別に世のため人のためのルールと考える必要はないのです。

「盗むな」もそうです。盗んでもいいという社会では、自分の持物・財産がいつ盗まれるかわからない。「殺すな」が守られない場合と同様、とても不安定な状況になってしまう。だから、「盗むな、殺すな」という社会のメンバーが最低限守るべきであると考えられているルールは、「よほどのことがない限り、むやみに危害を加えたりせず、私的な*テリトリーや財産は尊重しましょう、お互いのためにね」という契約なのです。

こうした観点から「いじめ」の問題をあらためて考え直してみると、誰かをいじめるといことは、今度は自分がいつやられるかわからないという、リスク（＝危険な状況を、自分自身で作っていること）になります。

いじめめるか、いじめられるかを分けているのは、単にその時々々の力関係によるもので、いつ逆転するかわかりません。

無意味に人を精神的、身体的にダメージを与えないようにすることは、自分の身を守る、自分自身が安心して生活できることに直結しているのです。

単に「いじめはよくない、卑怯なことなんだよ」「みんな仲良く」という規範意識だけではいじめはなくなりません。そうではなくて、「自分の身の安全を守るために、他者の身の安全をも守る」という、実利主義的な考え方も、ある程度学

校にもドウニウしたほうがよいのではないかと思ひます。

人類の歴史を見ても、「自然状態」ではどうしても人間は物理的に力のあるほうが「殺し、盗む」ものであり、そうした状態が長く続くと世の中が安定せず総崩れになるからどうしたらいいかを、賢人たちが長年考えてきたわけです。そして出した結論が、「〃人を殺さない、人から盗まない」というルールは、〃人に殺されない、人から盗まれない」ことを保障するために必要なものだ」という答えだったわけです。

残念ながら、「殺し、盗む」ことは人としてよくないことだから」という答えではないのです。

そもそも、クラス全員が仲良くできる、全員が気の合う仲間どうしであるということは、現実的に不可能に近いことです。人間ですから、どうしてもお互い（Ⅰ）が合わない人、理屈ぬきに気に障る人というのはいます。大人だって、ほとんどの人は何かしら人間関係の悩みを持っています。

そんなとき、ムカツクからといって攻撃すれば、ますますストレス過剰な環境を作り、③自分のリスクも大きくするようになるのです。

だからこそ「並存性」という考え方が大事なのです。ちよつとムカツクなど思つたら、お互いの存在を見ないようにするとか、同じ空間にいてもなるべくお互い距離を置くということしかないと思ひます。

ただし、露骨に「シカト」の態度を誇示するのも、攻撃と同じ意味を帯びてしまうことになります。朝、廊下や教室で会つて目があつたりしたら、最低限の「あいさつ」だけは欠かさないようにしましょう。あくまでも自然に「敬遠」するといつつもりでやつてください。

要は、「親しさか、敵対か」の（Ⅱ）Ⅱ（択）ではなく、態度ホリユウという真ん中の道を選ぶということです。

たとえばサバンの泉のほとりに、たくさんの種類の動物が、おたがい無関心な様子で同じ空間を平和に共有している姿を、テレビなどで見たことがあるでしょう。フランシスコやシマウマが、「われ関せず」という感じで一緒に水を飲んでいたりします。あんな光景を思い浮かべると「並存性」がイメージしやすいかと思ひます。

【II】

ルールについて少し補足しておきましょう。

何でもがなじからめで④「規則、規則」で縛つても、効果がありません。

ルールを決めるときは、どうしても最小限これだけは必要というものに絞り込むこと、「ルールのミニマム性」というものを絶えず意識することが重要です。

こういう学生がいました。彼は大学の文科系サークルの部員で、「今日も部の話し合いなんですよ……」と言って、うんざりした顔をしていました。サークルの、会則についての話し合いが煮詰まっているらしいのです。

大学サークルというのは長く続いているうちに、決まりがどんどん多くなっていくものなのです。その学生のサークルも、決まりが増えすぎてがなじがらめになっているようでした。「昔の先輩はこうやっていた」ということに囚われていて、「そういうことの話し合いだけでも疲れる」と言うのです。

私が「君たち、どんなふうに話し合っているの？」と聞いてみると、「先輩方から受け継いだものをどう守れるか、最近ちよつとルーズになつてるんじゃないかみたいな感じでやってます」と言います。「あのねえ、ルールというのはどうやったら最小限のルールが取り出せるかという話をしなければダメなんだよ。今まで積み重なってきたものうち、これは大事だけれども、これはもう要らないんじゃないのって、腑分けするのが話し合いでしょ？」と言うと、「ああ、そうか」と気づいてくれたようでした。

やはり、いつの間にか伝統が行動の規範になつてしまつたのです。前例というやつですね。「本件は前例によりますと……」と言うのはお役所のお年寄りだけかと思いきや、案外いまの若い人たちも同じで、「前例がこうだから、昔から先輩のやり方がこうだからこうしよう」という感じになつてしまうこともあるのです。何をやっても面白くなくなつていくという場合は、だいたいそういうものに多くとらわれているからです。

このような場合、ルールのミニマム性を追求する、つまり「何が大事なルールか、これだけは外せないものは何か」を取り出してきて、それはみんなできちんと守る。それ以外は、あまり硬直化しないよう、できるだけ広がりや融通をもたせ

ていくこと。そうすることが、ルール共有関係を、より有効に構築するための作法なのです。

また、人によってルールに対する感覚がかなり違うということを理解しておくこともとても大切です。ルールに関しては、そういうものを守ることに抵抗感のない人、さらにルールを守っていることそれ自体に歓びを感じるような人と、そういうものに縛られることをとても嫌がる人がいます。あまり無意味にルールを増やしていくと、集団や組織全体のモチベーションが下がってボロボロと脱落者が増えていきます。そして、もともと大事なものすらも守られなくなってしまう。ルールを決める立場に置かれた人は、その辺の柔軟なバランス感覚が必要ですね。

(菅野仁『友だち幻想 人と人とのつながり』を考える)より

*ホッブズ……十七世紀の学者

*テリトリー……領土・領域・なわばり

*モチベーション……意欲・やる気

(一) 〓 線部 a「フクスウ」、b「ドウニユウ」、c「ホリュウ」を漢字に改めなさい。

(二) (I) に入る動物は何か。漢字一字で答えなさい。

(三) (II) に入る漢字一字を答えなさい。

(四) に入れるのに最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そして イ しかし ウ たとえば エ もしくは

(五) — 線部①「ルールの共有性があるからこそ、自由というものが成り立つのです」について次のように説明しました。次の A、C に当てはまる表現を、指定された字数で本文中からそれぞれぬき出しなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

力の強い特定の人が自分だけの利益を考えて A(五字) ふるまうと、他の多くの人は自由を手に入れることができなくなる。しかし、すべての人が B(二十五字) ようにすれば、だれもが C(六字) を手に入れることができるようになるということ。

(六) — 線部②「別に世のため人のためのルールと考える必要はないのです」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア このルールは、他の人の命を守るなどというたいそうなものではなく、自分の命が奪^{うば}られないようにするためのものだから。

イ このルールは、親切心から他の誰かの財産を守ってあげるためのものではなく、自分の財産を奪^{うば}られないようにするためのものだから。

ウ このルールは、個人の命を守るという限定的なことを目的にしているのではなく、社会全体の秩序を保つことを目的としたものだから。

エ このルールは、他者の命や財産を守るという尊い使命にもとづくものではなく、自分の命や財産を奪^{うば}られないようにするためのものだから。

(七) — 線部③ 「自分のリスクも大きくすることになる」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目が合ったときにあいさつをしないと失礼にあたるので、無理にでも笑いかけるなどしないと、もめ事に発展するおそれがあるということ。

イ 気に入らない人に対して、相手を不快にさせる目的で行動を起こしてしまうと、相手からも仕返しされることとなり、ますます自分にとって望ましくない事態になるということ。

ウ 人間関係に悩みがあるからといって他人に八つ当たりすると、相手が困惑こんわくするばかりでなく、不快に感じた周りの人々との関係も次々とこわれていってしまうということ。

エ 気に食わない人がいた時に、相手が全く存在しないかのようにふるまうと、衝突しょうとつを避けることはできるが、根本的な相性あいしよの問題は解決しないので、ストレスがたまってしまふということ。

(八) — 線部④ 『規則、規則』で縛しばっても、効果がありません」とありますが、規則で縛しばっていくとどうなるのですか。次の文章の にあてはまる表現を、句読点をふくめずに十字以内で答えなさい。

ルールをどんどん増やすと、自由な活動ができなくなり、何をやってもおもしろくない状態になる。すると脱落者が増え、最終的には 。

(九) 筆者の考えるルールとはどのようなものですか。【I】の文章中から三十三字の表現を探し、最初と最後の五字をそれぞれぬき出して答えなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

(十) 本文の内容として正しいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。ただし、解答の順序は問いません。

ア たくさんのルールに縛られていることに窮屈きやうくつさを感じていても減らそうとはせず、それらのルールをすべて受け入れてしまっている人が多い。

イ 人は規則が多いと窮屈さを感じるが、その窮屈な状態に耐たえることでさらに強い規範意識が身につき、よりよい集団生活を送ることができるようになる。

ウ クラス全員が仲良くすることは不可能ではあるが、互いに多少のがまんをしながら忍耐にんたいづよ強く関わりを持ち続けることが、同じ場で共に生活をしていくためには大切なことである。

エ ルールに対する感覚は人によって異なるものだが、誰もが同じ感覚で受け止めることのできるルールをあきらめずに生み出そうとする必要がある。

オ 「いじめ」の問題を考えるにあたっては、学校生活を送る児童生徒それぞれが安全に暮らすためにはどうすればよいのかという発想を持つことも大切である。

〔問題二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学五年生に進級した「島愛里」(わたし)のクラスで、転校してきたばかりの「長野」君が学級委員長に立候補した。また女子のリーダー飯田さんは副委員長に「島さん」(わたし)を推薦する。

長野くんは、思った以上にダメな委員長だった。副委員長のわたしから見れば、ということだ。岡崎先生から見れば、最高の委員長だったかもしれない。初めは不安を覚えてははずの先生も、すぐに長野くんを信用した。学期途中での交替こうなんて、考えもしなかったにちがいない。

長野くんは熱心だった。あまりにも熱心すぎた。岡崎先生の指示をクラスみんなに忠実に伝え、守らせた。

例えば先生が職員室で長野くんに、静かに自習させなさい、と言う。すると長野くんが教室でみんなに、静かに自習

してください、と言う。そして一言もしやべらせない。例えば先生が長野くんに、掃除をサボらせないようにしなさい、と言う。すると長野くんがみんなに、掃除は絶対にサボらないでください、と言う。そして一人もサボらせない。そんな感じ。

長野くんは、副委員長のわたしにも①そうすることを求めた。男子はおれが見るから、女子は島さんが見てよ、と言った。またそんなことを、みんなの前で言うのだ。よく言えば、(1)裏表がない。悪く言えば、気が利かない。みんなは、気が利かない、をとった。あいつ何なの？ になった。島も何なの？ になった。

委員長が川本くんだったらなあ、とわたしは何度思ったことだろう。川本くんなら、同じことをもつとうまくやってたはずだ。岡崎先生からの指示も聞いて。最低限のことだけをみんなに伝えて。先生には、みんなが言うことを聞いてくれない、と軽めに言っつて。みんなには、おれが先生に怒られちゃうからさ、と軽めに言っつて。そういうのを、本当に軽やかにやっつて。でも陰では **A** を出して。

長野くんは、②そんなふう^にに立ちまわることができなかつた。はっきりと先生の **a** 側に立つのが委員長だと、そう思いこんでるみたいだった。

長野ウゼー、島ウゼー、という声があちこちから聞こえてくるのに時間はかからなかつた。みんな、その言葉を隠さなくなつた。男子だけでなく、女子までもが言うようになった。長野くんは知らん **B** をした。まちがったことはしてないんだから気にすることないよ、とわたしには言った。それもまた、みんなの前で言うのだ。勘弁してほしかつた。

上には岡崎先生と長野くん、下にはクラスのみんな。わたしは完全に **C** 狭み^{はさま}になった。そうとらえてるのはわたしだけ、というところがまたツラかつた。長野くんはわたしをまとめられないことを不満に思つてるはずで、クラスのみんなはわたしを長野派と見てるはずだつた。そして岡崎先生は。どうせ何も見えてない。

わたしは見事にきらわれた。幼稚園^{ようちえん}のころからずっと、みんなにきらわれないようにしてきたつもりなのに、あつさりきらわれた。巻きこまれてそうなることもある。自分の力ではどうにもならないこともある。そのことがショックだつた。

六月の初め。学校のトイレに入つたときに、飯田さんがほかの数人に言つた。

まさか島さんがあなるとはね。推薦なんかしなきゃよかった。

わたしは個室から出られなくなつた。飯田さんは、たぶん、わたしがそこにいるのを知つて、わざとそう言った。気づかずに言つたように見せたのだ。そう見せたと思ふことまで、計算してたかもしれない。

飯田さんたちは、次の授業の始まりを告げるチャイムが鳴り終わるころに、ようやくトイレから出ていった。わたしは、すぐには出ていけなかつた。五分ほど遅れて、教室に戻つた。

もちろん、授業は始まつた。副委員長が何やつてるの！ と岡崎先生に怒られた。

返事はしなかつた。だつて、トイレにいたとは言えない。③まず、飯田さんに対して言えない。そして、女子だから、言えない。そういうことを察してくれないのが、岡崎先生だ。自分もかつては女子であつたことを、もう忘れてるのかもしれない。

島さん、返事をしなさい！

それでもわたしは返事をしなかつた。ではどうしたかと言うと。机に②つつぶして、泣いた。あーあ、やっちゃつた、と思つた。泣いてるのに、どこか冷静だつた。外側からも内側からも、④ひどく冷やされてる感じがした。

その次の日からだ。学校に行かなくなつたのは。

(中 略)

夏休みの二週間前、島さんの家を訪問した長野くんは、夏休み初日に行われる県立みつば高校の野球の試合を観に行くことと誘う。最初「わたし」は断るが母親の勧めで球場へ行くことになった。以下は球場でのやりとりである。

長野くんがいきなり言う。

「ごめん」

「ん？」

「おれが、何か、変な感じにしちゃって」

「変な感じ？」

「クラスを、というか、島さんを」

何も言えなかった。いいよ、と簡単に言ってしまうことではない。だからといって、ほんとにそうだよ、とも言えない。たぶん、ぼくのせいです、と長野くんに言われたときのわたしのお母さんもこんな気持ちだったのかな、と思う。あのときも、いきなりだったはずだ。長野くんはいきなり訪ねてきて、いきなり謝あやまった。

でもお母さんは、長野くんを責めなかった。だから長野くんは、こうしてわたしを野球場に誘った。一度めでお母さんに責められてたら、この二度めはなかっただろう。

「ほんと、ごめん」

「いいよ、別に」と言う。言ってしまう。「わたしが勝手に行かなくなっただけだし」

「でも原因をつくったのはおれだから」

「いいついで」

初めてこう考える。原因をつくったのは、長野くんだろうか。

確かに長野くんはやり過ぎた。(3)がさつといえればがさつだった。でも自分で言ったように、まちがったことはしてない。自習時間に静かにするのは当たり前のことだ。掃除をサボらないのも、当たり前のことだ。先生にじゃなく、同じ児童に注意されるから **D** が立つというだけの話。勝手なのは、**D** を立てる側だ。タバコのポイ捨てを注意されて、うるせえ、とキレルようなもの。そう見ることもできる。

「何で、委員長をやるうと思っただの？」と尋たずねてみる。

「うーん」長野くんは考え、答になってないことを言う。「おれ、前んどこでは、長野じゃなかったんだよね。b 名字」

「じゃあ、何だったの？」

「コタニ。小さいに谷で、小谷。親が離婚したんだよ」

「ああ。そうなんだ」

「うん。だから引越してきた。こっちが母ちゃんの地元だから」

地元。(4) 住めば地元。お母さんがみつばの出身なら、半分は地元だったわけだ。

「長野は母ちゃんの名。えーと、旧姓つてやつ。まだそうなって四カ月だからさ、慣れそうで慣れないよ。長野つて呼ばれても、すぐには気づけなかつたりする。自分でも小谷つて言いそうになるし」

(中 略)

「でき、こっちではもう乱暴なことはしないでつて、母ちゃんに言われたんだよね」

「してたの？ 乱暴なこと」

「乱暴なことをしてたつもりはないんだけど。ケンカとかはよくしてた」

「ケンカつて、ロゲンカとかじゃなくて？」

「殴り合いもしてたよ。前いた片見里つてところは、もろ田舎だからさ、そういうことがなくもなかったんだよね。まあ、だいたいは、殴り合ったらお互いすつきりするんだけど、なかにはすつきりしないやつもいて、そんなやつCの親が学校にC文句を言うんだ。で、おれの母ちゃんが謝りに行く」

「へえ」Cとだけ言う。

それは乱暴だよ、と言いきりになるが、言わない。

「こっちは全然ちがうなあ、と思つたよ。みんな、おとなしいよね」

「おとなしいかもしれないけど。いやな子もいるよ」

「それも思った。陰で何かされそうだなって。片見里では、そういうことはなかったんだけど」そして長野くんは言う。「で、とにかくさ。もう高学年だし、おれ、母ちゃんのためにも、何ていうか、^⑤いいやつになろうと決めたんだよね」

「いいやつ？」

「うん。勉強の成績はよくないから優等生にはなれないけど、委員長にならなれるかもって思った」

「それで立候補？」

「そう。推薦されんのは無理だけど、立候補はできるんだから、なれるじゃん」

一言で言えば、単純。もう一言足せば、高学年なのに、単純。

「ただ、これまで委員長なんてやったことないから、よくわかんなくてさ。とりあえず先生の言うことを守ればいいだろうと思っただ。片見里では怒られてばっかいたけど、言うことを聞いとけば怒られないだろう、みんなにも言うことを聞かせれば絶対に怒られないだろうって。そしたら、何か、変な感じに」

「なったね」

「ほんとにわかんなくなっちゃったよ、どうすればいいやつになれるのか。で、そんなら自分がやるべきだと思うことをやろうっていうんで、島さんちに行って、謝った」

「ウチのお母さん、何て言った？」

「来てくれてありがとうって。こつちの親だから片見里以上にムチャクチャ言われるだろうと思っただけど、全然そんなことなくて。ちよつと驚いた。説明がヘタすぎてちゃんと伝わってないのかも思っただ、もう一回言ったよ。ぼくのせいですよって。そしたら、そんなことないよって言ってくれた。そんなことあるんだけど」

何だろう。何か、ほつとした。よかった、と思った。そこで長野くんを責め、叱りつける親じゃなくてよかった。長野くんに、こつちのお母さん、だと思われなくてよかった。

で、こつちも思う。そう思ってるってことは、わたし自身、長野くんは悪くないと思ってるってことなんじゃないの？

(小野寺史宜「梅雨明けヤジオ」より)

(一) 〓線部 a 「側」、b 「名字」、c 「文句」、d 「立候補」の読みを答えなさい。

(二)

| |
|---|
| A |
|---|

| |
|---|
| D |
|---|

 に入るものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、

| |
|---|
| D |
|---|

 は二か所あります。

ア 気 イ 腹 ウ 顔 エ 目 オ 舌 カ 板

(三) 〓線部(1)〓(3)の意味として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

(1) 「裏表がない」

- ア 相手によってさまざま言葉を变えて、本心を言わないこと。
- イ 心の中で思っていることとはちがうことを、つい言ってしまうこと。
- ウ 人前で発言する内容と心の中で思っていることが、同じであること。
- エ 自分が正直でさえあれば、相手がどのように思おうと気にしないこと。

(2) 「つつぶして」「つつぶす」

- ア 突然の出来事に驚きあわてふためくこと。
- イ あからさまにがっかりとしてみせること。
- ウ 気持ちがおろおろと動転して伏せてしまうこと。
- エ 腕の中に顔を隠すようにはったりと倒れ込むこと。

(3)「がさつ」

- ア 怖こわがったり落ち着かなくなったりすること。
- イ 行動や言葉などに細やかな気配りがないこと。
- ウ 感情に左右されず、冷ややかに物事を見ること。
- エ 積極的になれず、自分から行動を起こさないこと。

(四) 〜〜線部(4)「住めば地元」について、これの元になっていることわざを答えなさい。

(五) ——線部①「そうすることを求めた」とはどういうことですか。それを表している一文を探し、最初の五字をぬき出しなさい。

(六) ——線部②「そんなふうに立ちまわる」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先生からの指示をみんなができそうな最低限のことだけにして伝え、それでも理解してもらえない場合には自分の責任においてもう一度指示し直す。
- イ 先生からの指示をみんなにしつかりと伝達し、言うことを聞いてくれなかった場合は自分が怒られてしまうので従つてくれと学級委員の立場から頼む。
- ウ 先生の指示をしつかりと聞き、みんなができそうな最低限のことだけにして伝え、もし言うことを聞いてくれなかったら、自分の責任として先生に謝る。
- エ 先生からの指示を聞き、みんなにはそれを最低限のことだけにして伝え、たとえみんながその指示に従ってくれなくても自分の責任は問われないようにうまくふるまう。

(七) — 線部③ 「まず、飯田さんに対して言えない」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたし」がトイレにいたことがわかったら、飯田さんたちの言っていた悪口を聞いていたことも知られてしまうから。
イ 幼なじみの飯田さんが「わたし」に敵対意識を持っていたと知ってしまったが、今さらどうすることもできないから。
ウ 「わたし」はそれまで飯田さんにあこがれていたが、彼女の本当の気持ちを知ってショックを受けてしまったから。
エ 「わたし」は飯田さんがリーダーにふさわしい人だと尊敬していたが、彼女の本当の姿を知ってがっかりしたから。

(八) — 線部④ 「ひどく冷やされてる感じがした」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先生や同級生が「わたし」をばかにして笑っているのを聞き、不愉快に思う一方で、自分の行動に対する後悔も強くなっているということ。
イ 先生や同級生は委員長の長野くんだけを軽蔑しているのではなく、「わたし」のことも同じように思っていると感じられたということ。
ウ 先生や同級生によって追いつめられて、自分でおさえつけていた感情が一気に解放され、一方では本来の自分に戻りつつあるということ。
エ 先生や同級生から軽蔑されたり、同情されたりしていると実感することによって、「わたし」は自分が情けない存在だと思いが知らされたということ。

(九) — 線部⑤「いいやつ」とはどのような人ですか。文中の語句を用いて三十字以内で説明しなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。

(十) この文章について述べたものとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 心の中を打ち明けていくシーンでは短い表現がくり返されており、「わたし」が苦しみから次第しだいに救われてゆくさまが表現されている。

イ 心の中の言葉が断片的だんぺんてきにくり返かえされることによって、「わたし」の内面に熱い思いが次第にわき上がってくる様子が印象づけられている。

ウ 「わたし」の言動を作者の視点でとらえた短めの表現が繰り返されることで、「わたし」の生き生きとした様子が印象づけられている。

エ 「わたし」が感じたり思ったたりしたことをそのまま表現することで、落ち着きを取りもどすまでの心の動きをわかりやすく伝えている。